

## 短 報

看護学部1年次と学士編入3年次の合同科目である  
「People-Centered Care Nursing 論」の概要と課題高橋 恵子<sup>1)</sup> 中村めぐみ<sup>2)</sup> 射場 典子<sup>3)</sup> 大久保暢子<sup>1)</sup> 森井 美佳<sup>3)</sup>Summary and Challenges with the joint College of Nursing and Accelerated  
Bachelor of Science in Nursing “People-Centered Care Nursing Theory” CourseKeiko TAKAHASHI<sup>1)</sup> Megumi NAKAMURA<sup>2)</sup> Noriko IBA<sup>3)</sup> Nobuko OKUBO<sup>1)</sup> Mika MORII<sup>3)</sup>

## 〔Abstract〕

In the academic year 2015, St. Luke's International University began offering the “People-Centered Care (PCC) Nursing Theory” course to first-year nursing students in order to teach them about the main concepts of nursing, including lifestyle, health, environment, human, and people-centered care. PCC is a care model with people-centered initiatives in healthcare and health promotion based on partnerships between citizens and health professionals; this concept is taught as a course that is a basis of nursing practice. Furthermore, the present state of nursing and the direction of nursing science, including nursing research and ethics and healthcare system, have been described based on the historical development process of nursing as well as history of nursing science. The objectives are to form the basis for students to think about nursing and nursing science and cultivate basic skills in nursing practice. From the academic year 2018, this course was jointly offered to the College of Nursing and Accelerated Bachelor of Science in Nursing program, with 130 students participating in the course. In this article, the lesson content and methods to date have been re-evaluated, and the summary and challenges of the course held in the academic year 2019 have been reported.

〔Key words〕 People-Centered Care, Lifestyle, Health, Human, Nursing Education

## 〔要 旨〕

聖路加国際大学では、2015年度より看護学部1年次対象に、看護学を形作る主な概念となる生活、健康、環境、人間、People-Centered Care について学ぶ科目「PCC Nursing 論」を開講している。People-Centered Care とは、市民と保健医療専門職のパートナーシップを基にした市民主導型の健康生成をめざすケアモデルであり、本概念を看護実践の基盤において本科目を教授している。さらに、看護の歴史的発展過程を踏まえ、看護研究、保健医療システム、看護倫理、看護・看護学の現状とその方向性について触れ、学生が看護・看護学について考える土台を形成し、看護実践の基礎力を培うことを学習目標としている。2018年度より、看護学部1年次と看護学以外の学士号を取得した学士編入3年次との合同科目となり、学生130名に同時に教授することになった。そこで、本稿では、これまでの「PCC Nursing 論」の授業内容・方法を見直し、2019年度に実施した科目概要とその課題について報告する。

- 
- 1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
  - 2) 聖路加国際大学・国際・地域連携センター・St. Luke's International University, Center for International and Community Partnerships
  - 3) 聖路加国際大学看護学部臨時助教・St. Luke's International University, College of Nursing (part-time assistant professor)

受付 2019年10月23日 受理 2019年11月18日

## 【キーワード】 People-Centered Care, 生活, 健康, 人間, 看護教育

### I. はじめに

近年, わが国は, 医療技術の飛躍的な進歩の反面, 生命倫理の問題の顕在化, 家族形態の縮小化, 脆弱な人々の孤立など, 深刻な健康問題の危機に直面している。さらに, わが国は世界で類を見ない速さで超高齢社会に突入し, 同時に少子化による人口減少を伴い, 将来の保健医療人の不足が懸念されている<sup>1)</sup>。この健康課題の解決の鍵は, 市民がいかにこの健康課題を自分のこととして捉え, 保健医療従事者とともに自らの健康を守り創っていくにかかっている。そのため, 従来型の医療者主導による患者との関係では限界があり, 市民と保健医療専門職とのパートナーシップによる市民主導の健康生成に向けた考え方が不可欠である。聖路加国際大学(以下; 本学)では, 2003年より, わが国のこの健康課題への改善に向け, 市民が主体的に自分たちの健康を自分たちで創る社会を目指し, そのパートナーとしての看護職のあり方である“People-Centered Care(以下:PCCとする)”というケア形態の取り組みを先駆的に進めてきた<sup>2-4)</sup>。そのような中, 本学では2011年度のカリキュラム検討の際に, 大学が取り組んできたPCCをカリキュラムに導入することが検討された。看護学部1年次に, 看護学を形作る主要な概念である生活, 健康, 人間について学ぶ, 従来までの「生活と健康」という科目から, PCCの概念を軸に生活と健康を学ぶ科目として「PCC概論」という科目名での開講となった。さらに, 2015年度のカリキュラム検討の際, 基礎看護学で統合可能な科目を検討し, 「PCC概論(2単位)」と「看護学概論(2単位)」を統合した「PCC Nursing論(3単位)」の科目が開講された。また, PCC Nursing論の科目は, 2018年度より看護学部1年次100名と看護学以外の学士号を取得した学士編入3年次30名との合同で授業を行うことになった。そのため, 学部コースと学士編入コースの異なる学習背景の学生との合同授業と同時に, 学生数が増えたことによる授業方法の見直しも必要と考えた。

本稿では, 2018年度までのPCC Nursing論の授業方法を見直し, 実施した2019年度の本科目の概要と課題について報告する。

### II. PCC Nursing論の概要

#### 1. PCC Nursing論の学習目標・到達目標

PCC Nursing論は, 看護学部1年次と学士編入3年次の必修科目である。本科目の学習目標と学生の到達目標は, 表1に示す。

表1. PCC Nursing論の学習目標・到達目標

#### 〈学習目標〉

看護学を形作っている主な概念となる生活, 健康, 人間, 環境, People-Centered Careについて学ぶ。PCCとは, 本学が推進している市民と保健医療専門職のパートナーシップを基にした市民主導型の健康生成をめざすケアモデルであり, 本概念を看護実践の基盤において学んでいく。また, 看護・看護学の歴史的発展過程を踏まえ, 看護・看護学について考える土台を形成し, 看護実践の基礎力を培う。

#### 〈到達目標〉

- ①「生活」と「健康」について考え, 自分の言葉で説明できる
- ②市民と看護職のパートナーシップに基づいた市民主導型の健康生成(PCC)のあり方について考え, 自分の言葉で説明できる
- ③古来, 人々の営みの中でなされてきた看護が, 看護学に発展した経緯を説明できる
- ④看護・看護学の現状(看護職, 看護教育, 保健医療システム, 看護倫理, 看護研究など)とその方向性を理解し, 自分の考えを述べることができる
- ⑤学生各自が看護を実践する際の思考の方向性や視点を定め, 述べるができる
- ⑥自ら調べて考えながら学びを深め, 各課題を行うことができる

#### 2. 開講時期

本科目は, 看護・看護学の基盤となる科目であるため, 看護学部1年次と学士編入3年次の前期(4月上旬~7月下旬)に, 全24回開講している。2019年度は, 同曜日の1・2限の2コマ続きの時間割であった。

#### 3. 担当教員

本科目は, 看護・看護学の基盤となる科目であることから, 基礎看護学教員が担当している。また, 2019年度は臨床教授(PCC事業を運営・管理する部署の看護師)と臨時助教2名が, 本科目運営に携わった。

#### 4. 授業内容

##### 1) 授業概要

PCC Nursing論の各授業テーマとねらいは表2に示した。本科目は, 看護・看護学教育の歴史的発展, 看護の目的と方法, People-Centered Careの概念について導入時に紹介する。次に, 市民における「生活」と「健康」について, 学生自身の生活と健康を基に学ぶ。さらに, 学生自身の生活と健康を捉えた上で, 当事者となる健康課題を持つ人の病の体験を聴き, 当事者である市民の視点からPCCについて自分の考えを整理していく。加えて, 看護研究, 保健医療システム, 看護倫理に関する基礎的知識を学び, その上で臨床看護師のPCCの実践例を

聴き、PCC の必要性和看護・看護学の現状について学ぶ。これらの学びを、講義、体験学習、個人ワーク、グループワーク、発表、課題レポートの学習方法を通して、深めていく。

## 2) 授業紹介

本科目の全24回の授業を、以下に示す(1)導入：第1回～第5回、(2)生活と健康：第6回～第10回、(3)健康課題を持った人の生活と健康：第11回～第16回、(4)People-Centered Care と看護：第17回～第24回、の4つの大テーマに区切り、2019年度は進めた。

### (1) 導入 (第1回～第5回)

本科目の導入は、主に科目オリエンテーション、看護・看護学の歴史的発展、看護の目的と方法、PCC の概念について、第1回～第5回に設定した。第1回は、科目オリエンテーションとし、大学の建学の精神とカリキュラムのつながり、また科目の位置づけ、科目の概要を説明した。また、第2回は、本学の看護・看護学教育の歴史を伝える目的から、聖路加国際大学と聖路加国際病院の歴史について本学の歴史編纂に関わられている講師が説明し、加えて本学臨床教授から歴史的発展過程として聖路加国際病院の今についての内容を入れた。第3回は、フローレンス・ナイチンゲールの「看護覚え書」<sup>5)</sup>を基に看護学の始まりについて、第4回目には、ヴァージニア・ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」<sup>6)</sup>を基に、看護の目的と方法について、フローレンス・ナイチンゲール記章を受章された講師より、説明いただいた。第5回は、本科目の中心概念となる People-Centered Care における提唱の経緯を説明した。看護における PCC の必要性を学習した上で、看護職が当事者(市民)とどのように向き合うべきか、看護職の基本的姿勢について学生がこれから考えてほしいことを伝えた。この段階での見直しは、2018年度まで、PCC の概念の説明は、本科目の後半に設定されていたが、これまでの学生からもっと早い時期から PCC について学びたかったとの意見が聞かれ、2019年度より PCC の概念の説明を、本科目の前半に設定した。

### (2) 生活と健康 (第6回～第10回)

次に、市民における「生活と健康」のテーマを、第6回～第10回に設定した。この学習のねらいは、「学生自身が市民のための健康支援の場を市民の立場で利用し、自己の生活と健康を確認し、①市民が主体的に健康を創り守るために市民自身ができること、②市民が自分の健康を創り守るために必要な支援、③市民にとって利用しやすい支援環境、について考える」ことであった。そのため、第6回～第8回の3コマを用いて、1つ目は、本学が運営している市民健康情報サービスの場を活用し、自分自身の健康状態(血圧、体温、脈拍、呼吸、骨密度、基礎代謝量、体格指数：BMI、Quality of Life：QOL)

を確認すること、2つ目は、自分の平均的な一日の生活行動(活動、休息、食事、排泄、清潔)を書き出すこと、3つ目に、自分の生活行動と健康状態から、自己の生活と健康について評価・考察の分析を行うことを、各自が取り組む課題として提示した。第9回～第10回では、各自が取り組んだ課題を持ち寄り、学習のねらい①～③に沿ってグループワークを行った。ワークで話し合った内容をグループで1枚のポスターに書き、全グループが話し合った内容を発表し、互いにコメントをしあった。さらに、発表後の学びを各自が統合するためにA4用紙1枚にまとめる個人ワークを授業時間内で確保し、授業終了後に提出してもらった。

この段階での見直しは、課題体験学習後の学生の学びを深められるよう、2コマの時間を用いてグループワークを実施したことであった。

### (3) 健康課題を持った人の生活と健康 (第11回～第16回)

第11回～第16回では、「健康課題を持った人の生活と健康」をテーマに設定した。この学習のねらいは、「健康課題を持った人から病の体験を実際に聴き、①当事者はどのような体験をしているのか、②実際に聴いた当事者がもつ強みとは何か、③病を持つ人の生活を支えるために必要な支援や環境は何か、について考える」ことであった。そこで、第11回では、入院治療を体験した人の生活の変化と生活者としての気がかりに関する研究調査の一部を紹介し、当事者がどのような生活の変化を余儀なくされ、どのような気がかりを抱いているのかを話した。第12回に、当事者の健康と病いの語りをデータベース化し、ウェブサイト上で公開する活動団体(ディベックス・ジャパン)の理事から、活動団体の目的と内容を紹介いただいた。次の時間(第13回)を活用し、学生は、実際に紹介されたそのウェブサイトから当事者5名の病の体験の語りの動画を自由選択して視聴し、感想を書くよう課題を提示した。第14回には、ウェブサイトで語られている当事者2名(外科的治療のために入院体験したろう者の方と、事故により脊椎を損傷し車いすの生活を送られている方)が、実際に大学の教室に来られ、学生に直接、病の体験を語っていただいた。学生と当事者との距離を近づけるために、130名の学生を2グループに分けた。当日聴くことができなかった一方の体験者の語りについては、公開されている動画サイトを紹介し、全学生が2名の病の体験を聴くことができるようにした。第15回～第16回では、学習のねらい①～③に沿ってグループワークを行い、学びを深めていった。前回のグループワーク同様、話し合った内容を1枚のポスターに書き出して、グループ発表し、学生間のフィードバックのコメントをし合い学生の考えを共有した。

この段階の見直しと工夫は、授業で紹介した活動団体



の当事者体験の動画を、病いの体験者から直接話を聴く前に、視聴学習する課題を取り入れたことであった。また、実際に直接聴くことができなかった一方の当事者の病の語りも動画サイトを通して聴くことができるようにしたことであった。また、この段階の最後でも2コマの時間を用いてグループワークを設定したことも2018年度からの修正点であった。

#### (4) People-Centered Care と看護 (第17回～第24回)

最後に、「People-Centered Care と看護」のテーマで、本学の様々な領域の看護教員と、様々な領域の臨床現場の看護師による授業を第17回～第24回に設定した。この学習のねらいは、「People-Centered Care の実現に向け

て、①市民にとっての健康をどのように捉えたか、②市民（当事者）が主体的に自分の健康を創り守るために、市民（当事者）が具体的にできることは何か、③看護職は具体的にどのような姿勢で、市民（当事者）と向き合うとよいのか、について自分の考えをまとめる」こととした。そのために、看護実践の成り立ち、保健医療システム、看護倫理に関する内容を含めた上で、臨床看護師によるPCCの実践例の紹介を取り入れた。第17回は、「看護実践の成り立ち」について、失語症を持つ人とそのケアを例に、看護実践が看護の基礎教育で学んだ知識や技術、当事者の声や当事者経験からの情報、看護研究の結果を用いて成り立っていることを教授した。第18回で

表2. PCC Nursing 論の授業テーマとねらい

実施回数	授業テーマ	授業のねらい
第1回	オリエンテーション	聖路加国際大学の建学の精神とカリキュラムのつながり、看護学導入科目の位置づけを理解する
第2回	St. Luke's の歴史	聖路加国際大学と聖路加国際病院における看護・看護学教育の歴史を理解する
第3回	看護学の始まり	フローレンス・ナイチンゲールの「看護覚え書」を基に、看護学のはじまりについて学ぶ
第4回	看護の目的と方法	ヴァージニア・ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」を基に、看護の目的と方法を学ぶ
第5回	People-Centered Care	People-Centered Care の提唱の経緯を通して、看護職の基本的姿勢とパートナーシップについて考える
第6回	生活と健康 (1) (2) (3) : 自己の生活と健康	学生自身が市民のための健康支援の場を市民の立場で利用し、自己の生活と健康を確認し、下記の3点について考える ① 市民が主体的に健康を創り守るために市民自身ができること ② 市民が自分の健康を主体的に創り守るために必要な支援 ③ 市民にとって利用しやすい支援環境
第7回		
第8回		
第9回	生活と健康 (4) (5) : グループワーク・発表	健康課題を持った人から病の体験を実際に聴き、下記の3点について学ぶ ① 当事者はどのような体験をしているのか ② 実際に聴いた当事者がもつ強みとは何か ③ 病を持つ人の生活を支えるために必要な支援や環境は何か
第10回		
第11回	健康課題を持った人の生活と健康 (1) : 健康課題を持った人の生活の変化と気がかり	健康課題を持った人から病の体験を実際に聴き、下記の3点について学ぶ ① 当事者はどのような体験をしているのか ② 実際に聴いた当事者がもつ強みとは何か ③ 病を持つ人の生活を支えるために必要な支援や環境は何か
第12回	健康課題を持った人の生活と健康 (2) (3) (4) : 病の体験を聴く	
第13回		
第14回		
第15回	健康課題を持った人の生活と健康 (5) (6) : グループワークと発表	看護実践の根拠を理解する
第16回		
第17回	People-Centered Care と看護 (1) : 看護実践の成り立ち	市民がかかわる保健医療機関、専門職などの保健医療システムについて理解し、市民の健康に資する看護職の役割を考える
第18回	People-Centered Care と看護 (2) : 保健医療システム	
第19回	People-Centered Care と看護 (3) (4) : 多様な病態・価値観と看護倫理	保健医療現場における市民の様々な価値観や倫理的課題にどのように向き合い、決断していくのかを考える
第20回		
第21回	People-Centered Care と看護 (5) (6) : 看護職から PCC の実践例を聴く	様々な現場で活動する看護職の PCC の実践例を聴き、PCC についての理解を深める 「予防医療における実践例」「病院・病棟における実践例」「地域・在宅における実践例」「海外における実践例」の紹介
第22回		
第23回	People-Centered Care と看護 (7) : まとめ (グループワーク・発表・レポート)	People-Centered Care の実現に向けて、下記の3点について自分の考え・意見をまとめる ① 市民にとっての健康をどのように捉えたか ② 市民（当事者）が主体的に自分の健康を創り守るために、市民（当事者）が具体的にできることは何か、 ③ 看護職は具体的にどのような姿勢で、市民（当事者）と向き合うとよいのか
第24回		

は、「保健医療システム」について、様々な健康課題を持つ家族の事例から保健医療システムと看護の役割を学ぶ授業を提供した。第19回～第20回では、保健医療現場における人々の様々な価値観や倫理的課題に、看護職がどのように向き合い、決断していくべきかを考える機会を、倫理原則を説明しながら、臨床で遭遇する身体拘束事例のDVD教材<sup>7)</sup>を用いて提供した。そして、第21回～第22回では、「PCCにおける実践例」をテーマに、聖路加国際病院と聖路加国際大学の看護職、また海外で活動した経験をもつ看護職が、それぞれの領域におけるPCCの実践例を紹介した。2019年度は、①予防医療におけるPCC実践例、②病院・病棟におけるPCC実践例、③地域・在宅におけるPCC実践例、④海外でのPCC実践例を具体的に紹介した。最後に、第23回～第24回では、これまでの全22回の学習目標と授業内容を、20分程度に要約したものをレビューし、学生と振り返った。その後、市民にとっての健康について考えるドラマ仕立てのDVD教材<sup>8)</sup>を用い、その事例を題材に、これまでの授業の学びを通した、個人ワーク、そしてグループワーク、グループ発表を行い、PCCの理解を深めていった。最終のグループワークにおいても、学生間で意見交換しながら1枚のポスターに考えをまとめ、グループ発表し、その後に教員から一言ずつ最終授業としてのコメントをした。最終の学びの統合として、「People-Centered Careの実現に向けて～市民の視点と看護職の視点から～」をメインテーマにした、最終課題（レポート2000字から3000字）を出し、本科目の授業を終了した。

この段階の見直しは、臨床看護師による実践例の領域を2領域増やし、グローバルな視点も持てるよう海外における実践例も加えたことであった。また、本科目の統合として、最終段階にもグループワークを2コマ用い、グループワークと同じテーマの課題レポートを提示することにした。

### 5. 評価方法

本科目の評価は、①レポート60%（最終レポート、授業での各種提出物）、②参加態度40%（グループワークでの取り組み、予習・復習への取り組み、連絡・指示事項への対応状況）で行った。

## Ⅲ. 学生の感想と授業評価

学生の授業での参加状況、および、各授業へのフィードバックを基に、本科目の振り返り評価を行った。学生からのフィードバックには、「講義を受けるにつれて市民中心の医療を提供することの大切さがわかった」「これから看護学を学んでいく中、自分の考え方は市民中心になっているのか、相手は何を求めているのかを常に自分に問

いかけようように努めることが重要だと思った」「毎回新しい考えを学べた」といった、PCCの必要性の理解やPCCの実現に向けた学びができていた。また「当事者の話を聴き、当事者の持つ強みを知った」「当事者の声を聴ける機会がよかった」「看護師の実践例を聴き、PCCが実際の現場でどのように実践されているかを知ることができた」「当事者の体験談や現役看護師のアドバイスは、看護を学ぶモチベーションにつながった」「海外においてもPCCが大切だと実感した」といった、当事者や現場の看護職からの話は、学生の理解と学びを深めるだけでなく看護学への学習意欲に繋がっていた。また、「グループワークをしたことで新しい見方を知り、深い学びになった」「学部生と学士とのグループワークは、新しい知見を得られる機会だった」と、テーマ毎に2コマを用いてグループワークを取り入れたことでの学びと深まりが示された。また、学部生と学士編入生が混在したグループによる刺激や学びの深まりの声も多く聞かれた。「動画はわかりやすい」といった当事者が語る動画教材や動画教材を用いたグループワークの教授方法も学生の学習理解と学習意欲に繋がっていた。しかし「グループワークの発表時間が短い」「グループワークのメンバーを毎回変えてほしい」といったグループ発表の時間やメンバーに対する要望の声もあり、次年度の授業改善に向けて検討したいと考える。

## Ⅳ. 今後の課題と展望

本科目における授業見直し後も、学生の学習成果や学習意欲の向上も見られ、学習目標も達成し、授業方法の見直しによる様々な工夫に意義があったと思われる。ただし、学部生と学士編入生の学習進行度の違いと100名を超える学生数の課題を、常に考え授業を計画し提供する必要がある。学部生と学士編入生の学習進行度の違いの課題とは、学士編入生の修学年数が2年間と、学部生と異なり、学部生が次年度に学習する科目を、学士編入生は受講し終えているまたは、近い時期に学習する予定となっている。2019年度は、看護倫理に関する基礎的知識を学ぶ授業を本科目の後半に設定していたが、学士編入生3年次は、他の科目においても看護倫理に関する授業が数日後に設定されていた。今回は、担当教員がその現状に直前で気づき、他の科目の看護倫理の授業と重複しないよう調整することができた。担当教員は他の科目の授業内容を全て把握していないため、重複に気づかないリスクがある。しかし、その現状を把握できれば、重複を避けた充実した授業を提供することが可能になることが分かった。また、100名を超える学生数により、グループワークのフォローと発表時間の確保の困難もある。しかし、グループワークは学生の学習を促進し、学生から

の評価も高い。限られた時間と100名を超える学生数ではあるが、グループワークで学生間の意見を情報共有する改善方法を図っていけると考える。また、2019年度の本科目の運営は、専任教員、臨床教授、臨時助教で進めてきたが、課題学習、グループワーク、レポートへの1人1人の学生へのフィードバックを行う上での教員のマンパワーの課題も挙げられる。引き続きこれらの課題を検討しながら、限りある資源を有効に活用し、授業目標・到達目標に向けた充実した教育を提供していきたいと考える。

## V. おわりに

PCC Nursing 論は、入学したばかりの学生が、市民と保健医療専門職のパートナーシップを基にした市民主導型の健康生成をめざす看護を学ぶ重要な科目であると考ええる。今後も、学生からの各授業のフィードバックや、本科目に関わってくださる方々のご意見を基に、授業方法の工夫、内容の改善を図っていきたいと考える。

## 謝 辞

本稿をまとめるにあたり、科目開講経緯の情報提供にご協力いただきました三重県立看護大学理事長の菱沼典子先生、姫路独協大学の太橋久美子先生をはじめ、本科目に関わって下さった皆様に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省. 平成30年度版厚生労働白書 [Internet]. <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/18/>

[Cited 2019-10-22]

- 2) 聖路加看護大学21世紀COE プログラム. 21世紀COE プログラム市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点：研究成果最終報告書. 東京：聖路加看護大学21世紀COE プログラム運営事務局；2008.
- 3) 高橋恵子，亀井智子，大森純子ほか. 市民と保健医療従事者とパートナーシップに基づく「People-Centered Care」の概念の再構築. 聖路加国際大学紀要. 2018；4：9-17.
- 4) Kamei T, Takahashi K, Omori J, et al. Toward advanced nursing practice along with people-centered care partnership model for sustainable universal health coverage and universal access to health. Rev Lat Am Enfermagem. 2017；25. e2839 (10p).
- 5) フローレンス・ナイチンゲール（湯槇ます，薄井坦子，小玉香津子ほか訳）. 看護覚え書：看護であること看護でないこと. 改訳第7版. 東京：現代社；2019.
- 6) ヴァージニア・ヘンダーソン（湯槇ます，小玉香津子訳）. 看護の基本となるもの. 再新装版. 東京：日本看護協会出版会；2016.
- 7) 手島恵，鶴若麻里監修. [DVD]. 身体拘束はケアでしょうか？【身体拘束】.（終わりのない生命の物語2：5つのケースで考える生命倫理；第1巻）. 丸善出版株式会社；2019.
- 8) 手島恵，鶴若麻里監修. [DVD]. 日常の行方【働くことと健康】.（終わりのない生命の物語2：5つのケースで考える生命倫理；第5巻）. 丸善出版株式会社；2019.